

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.21）研究発表・パネルセッション要旨 第1会場 〕

「できる」に繋げる教材開発の意義と可能性を考える

- 研究と教育の接点 -

小山悟・嶋田和子・迫田久美子・嶋田徳子

時代や社会状況の変化とともに日本語教育のあり方も当然変わっていかねばならないが、現実には必ずしもそうではない。初級の授業などは典型的で、いまだに多くの教育機関で伝統的な積み上げ式教授法が採用されている。この状況を変えるには、研究者と現場の教師が「教材」を通して直接・間接的に日本語教育のあり方を論じ合うこと、すなわち教材開発者がこれまでの研究成果を盛り込んだ教材を開発し、その背後にある基本的な考え方を説明する一方で、現場の教師は慣れ親しんだ教え方に固執せず、新しい教材から新しい教え方を学び、実践を通して明らかになった新たな課題をフィードバックしていくことが必要である。このパネルでは、教材開発の意義と可能性を「研究と実践の橋渡し」、「授業の変革」、「教師の成長」の3点から論じ、日本語教育のあり方を見直す場を提供したい。

（小山 九州大学，嶋田 イーストウエスト日本語学校，迫田 広島大学，
嶋田 （独）国際交流基金日本語国際センター）

〔2011年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.21）研究発表・パネルセッション要旨 第1会場 〕

教育と文法をつなぐ方法論

庵功雄・松田真希子・小西円・藤城浩子・森篤嗣

本パネルでは、近年の日本語教育文法研究の潮流に身を置きつつ、明示的な方法論にもとづいて行った研究の成果を報告した。発表 では、「は」と「が」の使い分けに関する新しいフローチャートを明示的に教えた実験群と教えなかった統制群とで実験を行った。その結果、両者の正答率には有意差があった。発表 では、シマシタカに対する無標の答えはシテイマセンであることをコーパス等で確認し、シテイマセンをシマセンデシタより先に導入する授業実験を行った。その結果、この導入順の有効性が明らかになった。発表 では、初級日本語教材ではレンマのみが扱われていることの問題点を伝聞の「そうです」を例に検討した。その結果、丁寧体の「そうです」と普通体の「そうだ」の間には文体の差を超えた違いがあることがわかった。発表 では、「使用頻度が低いものは授業では扱わない」という「常識」が持つ問題点を「～んだから」を例に様々な角度から明らかにした。

（庵 一橋大学，松田 金沢大学，小西 東京学芸大学，藤城 大月短期大学，森 帝塚山大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.21）研究発表・パネルセッション要旨 第2会場 〕

神奈川県西部在住のペルーとベトナム家庭におけるバイリンガル教育の実態

- 親・子・地域のネットワークからの考察 -

宮崎幸江・宮本カルタビアーノ百合子・河北祐子・櫻井千穂

バイリンガルを育てるには親の意志が重要な鍵をにぎる（Sakamoto 2006）が，日本のように民族の多様性に乏しい国（Sato 2004）でバイリンガルを育てるには，個人のみだけでは限界がある（Landry & Allard 1991）本パネルは，神奈川県西部に在住するペルーとベトナムの3家族のバイリンガル教育を親と子，地域の日本語支援者の立場から見た実証研究のデータを基に多角的に分析する。

研究の結果，親はバイリンガルを育てるために試行錯誤しているが，子供の年齢と共に母語離れが進んでいる実態が明らかになった。また，子供達は多言語・多文化環境で2言語を場面によって使い分けアイデンティティを表現することを学んでいることも判明した。討論では，バイリンガルの認知力と2言語の関係について実証研究の結果を踏まえ，日本で言語マイノリティの子供達に必要な教育支援や教育環境について課題を共有する。

（宮崎・河北 上智短期大学，宮本 カリフォルニア大学バークレー校，櫻井 大阪大学大学院生）

[2011 年度日本語教育学会春季大会 (東京国際大学 , 2011.5.21) 研究発表・パネルセッション要旨 第 2 会場]

生活のための日本語：浜松調査

- 在住外国人の学習ニーズを探る -

金田智子・黒瀬桂子・中上亜樹・金孝卿

日本で生活する外国人に対する日本語教育の内容や方法を決定する際、彼らの日本語使用の実態や学習ニーズに関する基礎資料に基づく検討は必須である。当研究グループは、2008 年に「生活のための日本語：全国調査」を実施し、在住外国人にとって日本語で行うことが困難な事柄や学習ニーズに関し、全体的傾向を明らかにした。更に 2010 年秋には困難度を決定づける要因の解明、日本語で行うことが重要とされる事柄の同定とその要因の解明を行うため、「生活のための日本語：浜松調査」を、外国人 101 名を対象に実施した。この調査は、アンケート、インタビュー、日本語能力測定 (J-Cat) で構成される。

本パネルセッションでは、浜松調査の結果を報告し、「生活のための日本語」として在住外国人が求める学習内容 (学習ニーズ)、その要因、学習ニーズの捉え方、さらには日本語教育の内容・方法への反映の仕方について来場者とともに議論する。

(金田 学習院大学、黒瀬・中上 国立国語研究所、金 (独) 国際交流基金日本語国際センター)

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.21）研究発表・パネルセッション要旨 第3会場 〕

喪い奪われた文字の獲得による新たな社会関係の構築と多文化社会の創出

春原憲一郎・高野雅夫・田中望・杉山春

移民受入れが政治の議論の俎上に上っている今，言語・言語の境界を越え移動した人たちが識字・書記言語能力を獲得できるか否かは，多文化社会の創出に向けて喫緊の課題である。特に，現在の高度高速情報化社会の渦中で十全な成員として社会参画できるためには，口頭能力のみならず，文字情報にアクセスし社会資源として活用する力が不可欠である。しかし，現在の状況は多くの定住型外国人にとって十分な識字能力を獲得するための学習環境・支援環境に恵まれているとは言いがたい状況にある。本パネルでは元非識字であった当事者が，生きるための「武器となる文字と言葉」を獲得するまでの苦闘の過程とその社会的意味，内外国人にかかわらず<声/voice>の喪失が社会的関係からの疎外と深く結びついていること，そしてさらにそこから奪われた<声>を取り戻していくことが新たな社会の構築につながっていくことを，多様な事例から報告し，議論したい。

（春原（財）海外技術者研修協会，高野 夜間中学卒業生，田中 立教大学，杉山 ノンフィクション作家）

[2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.21）研究発表・パネルセッション要旨 第3会場]

教室外の世界で行われている「評価」

- その多様性を探る意義 -

宇佐美洋・近藤彩・内海由美子・早野恵子

他者（特に外国人）の言語運用を評価する際の「評価価値観」は、評価者によって大きな違いがあり、現実の言語活動場面とは、異なる価値観のぶつかり合いの場と捉えることができる。そうした多様な価値観のぶつかり合いの中でよりよい人間関係を構築していくための方策を、生活場面の現実のやりとりに即し、考察を重ねていく必要がある。

そこで今回のパネルディスカッションでは、以下のようなことを行う。

- ・「評価価値観の多様性」が現れやすいと思われる場面として、「ビジネス場面」、「子育て場面」、「医療コミュニケーション場面」の3つを設定する
- ・それぞれの場面について、そこで起こり得る「評価のばらつき」「評価価値観のぶつかり合い」の実態を、事例に即して紹介するとともに、分析・考察を行う。
- ・「評価価値観の多様性の自覚」「他者の評価価値観の推測」「自己の評価価値観の調整」のために何が必要となるかについて、ディスカッションを行う。

（宇佐美 国立国語研究所，近藤 政策研究大学院大学，内海 山形大学，
早野 （社福）恩賜財団済生会熊本病院）

〔2011年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第1会場〕

日本統治下台湾の「国語講習所」用教科書の内容

- 台湾教育会編『新国語教本』を中心に -

藤森智子

本報告は、日本統治下台湾の「国語講習所」用に編纂された日本語教科書『新国語教本』1933年版，1939年版の内容を検討する。

各課の題材を分類した結果，「日常生活」を扱った課は，旧教本が29.5%，改訂版が24.2%を占めた。その配置は巻1の比率が最も高かった。社会の一員としての素養を育成する「公民養成」は，道徳心，公共心の養成に関わる課が，旧教本，改訂版の各巻とも15%から20%の間を占めた。特徴的なのは，知識，智能の項目であり，旧教本では巻2で37.8%，巻3で62.2%，改訂版では巻1で25%，巻2で40%と高い比率を占めた。大日本帝国国民としての資質を養成する「国民養成」に関わる課は，旧教本巻1は0%，巻2は15.5%，巻3は15.6%であり，改訂版巻1は18.8%，巻2は29.1%を占めた。「その他」は旧教本で平均5.3%，改訂版で1.8%を占めた。

以上の分析から，『新国語教本』は，皇民化運動が推進されてから出版された改訂版は「国民養成」の項目が増加しているが，旧教本，改訂版ともに高い比率で「公民養成」の項目が含まれることが明らかになった。

（田園調布学園大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 1 会場 〕

グローバル化社会の日本語教育
- 教科書分析から香港における地域化を探る -

青山玲二郎・瀬尾匡輝・米本和弘

近年，英語教育の分野では，欧米の方針や教授法，教材を各国，各地域に適した方法に変えて実践する地域化の重要性が叫ばれている。日本語教育においてもその必要性は認識されつつあるものの，香港においては，日本の日本語教育を標準的なものとし，学習者のニーズや地域性を無視した点も見受けられる。本発表は，香港で出版された教科書を地域化という視点から分析し，学習者のニーズや言語政策がどのように教材開発に影響しているのかを探り，日本語教育の地域化の実情を検証する。

教科書分析の結果，香港の教育・言語政策や学習者の学習動機が教材に反映されているなど，学習者の変化に対応した地域化の試みが行われていた。しかし，日本で出版された教科書のスタイルを踏襲したり，特定の規範を反映したりするなど，多くの教科書は表面的な地域化にとどまっていた。本発表では，分析をもとに多様化する海外の日本語教育の地域化の可能性についても議論する。

（青山 香港城市大学専上学院，瀬尾 香港大学專業進修学院，米本 マギル大学大学院生）

〔2011年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第1会場 〕

「内省ロジックモデル」を用いた教師の振り返り活動

- システマティックなコース評価としての有効性 -

遠藤藍子・田仲正江・小熊貞子

教師が内省の実践家を目指してコース評価を実施しようとした場合，いかにすれば Plan-Do-See と循環し自己成長に有効な内省を実行できるかについては，アクション・リサーチ^{注1}の他には殆ど論議されてきていない。そこで今回，筆者らは安田・渡辺（2008）^{注2}を参考に，システマティックな内省方法として「内省ロジックモデル」，すなわち「インプット アクティビティ アウトプット アウトカム インパクト」の流れで見通しよく内省活動を循環させ得るモデルを共同考案した。このモデルによる内省活動を実践してみた結果，各実施者には自覚を超えた内省が引き出された。本発表では，その「内省ロジックモデル」の概要および具体的な実践例を提示し，その結果の検討，考察を通して，当該モデルの妥当性を問うていく。

注1 横溝紳一郎（2000）『日本語教師のためのアクション・リサーチ』他

注2 安田節之・渡辺直登（2008）『プログラム評価研究の方法』

（遠藤 昭和女子大学，田仲 東京国際大学，小熊 東京農工大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 1 会場 〕

国際的人材としての日本語教師養成に向けて

- 母語話者 JFL 教師に望まれる資質の分析から -

平畑奈美

本研究の目的は、海外で活動する JFL 日本語教師に海外の現場で望まれる資質を調査し、日本語教師養成に役立つ知見を提供することである。そのために、世界 5 地域、26 カ国・地域の代表的な日本語教育機関で活動する母語話者/非母語話者日本語教師 41 名を対象に詳細なインタビュー調査を実施、大谷(2008)の開発した質的分析手法 SCAT とミックス法を併用して分析を行った。その結果、望まれる資質として「教育能力」「対人能力」「調整能力」の 3 カテゴリーと、その下位項目としての 10 の資質を抽出、中でも「対人能力」カテゴリーの「コミュニケーション能力」と「協働能力」が、最も重視されるべきであると結論づけた。また国際的人材としての JFL 教師の長期的な養成には、OJT(On the Job Training)の体制作りを可能とする国の関与が必要であり、その際には海外の現場の声を取り入れる姿勢が重要であるとした。

（滋賀大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 1 会場 〕

言語的マイノリティ児童生徒のためのバイリンガル読書力評価ツール(B-DRA)の開発

中島和子・櫻井千穂

本発表では、言語的マイノリティ児童生徒の母語と日本語の読書力育成のために教育現場で使える読書力評価ツールとして開発した Bilingual Developmental Reading Assessment(B-DRA)の日本語版について述べる。B-DRA は北米の多読用読書力評価法(DRA)を改変した、子どもが一冊の本を読みこなす力をインターアクティブに測る面接式アセスメントである。開発に当たり、発達段階に応じて選定した 65 冊のテキストの形態素解析を実施、また日本語母語児童(105 名)、外国人児童生徒(154 名)に対するパイロット調査を重ねた。その結果を踏まえ、実施方法と評価方法を再考し、認知と言語レベルのギャップに対応したテキスト及び教育現場の指導者のための観察ガイド、採点・評価ガイドを作成した。また調査結果から B-DRA は子どもの二言語の読書力を長期的、多角的、包括的にモニターできる診断的評価であり、評価自体が彼らの達成感、有能感を高め、読みへの関わりを促す「学習のための評価」(Grabe 2008)となる可能性が示唆された。

（中島 トロント大学, 櫻井—大阪大学大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 1 会場 〕

関係を発達させるためのことばは，どのように獲得されたか

- 外国につながる小学生への日本語支援実践から -

金丸巧

子どもの成長において，周囲との関係発達は大きな意味を持つ。しかし，近年，学校に在籍する外国につながる子どもの中には，教室の中で孤立している子どもも少なくない。そこで，本研究では，外国につながる子どもが，周囲との関係を発達させるためのことばをどのように獲得したのかを明らかにするために，小学 2 年生女児 E と発表者の関係性の変容と，それに伴う E の発話機会及び発話内容の変容を分析した。その結果，E の発話機会や発話内容は，より積極的且つより E の気持ちや考えに沿った内容へと変化し，関係を発達させるためのことばの獲得につながっていったことが分かった。その背景には，E が伝えたい内容を最後まで完結させ，互いに理解し合う経験を積み重ねるといふ E と発表者の日々の関わり合いによって生まれた安心感や信頼感が支える関係性の深まりがあった。

（早稲田大学大学院生）

〔2011年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第1会場〕

EPA 介護福祉士候補者向け国家試験対策

- 効率良く解くためのテクニック -

丸山真貴子・三橋麻子

EPAにより来日した看護師・介護福祉士候補者が受験する各国家試験について、様々な提案や検討が行われているが、日本語を母語としない候補者が試験に合格するためには、専門的な知識・語彙をはじめ、高度な読解力、試験特有の表現の理解と、試験を時間内に効率良く解くためのテクニックが必要とされる。

そこで、本研究では日本語教育の観点より、介護福祉士国家試験中の重要項目で構成された問題集から、試験内で出現率の高い表現（表現・語彙）を分析・考察し、試験の対応項目として、問題文の文末表現、ポジティブな表現とネガティブな表現、設問表現、最重要語彙の四項目について傾向を提示し、対応策として提案することを目的とする。結果、どの項目においても、表現・語彙やそれぞれの分野などに試験を解く際のテクニックとできる傾向をみることができた。さらに、今後の教材作成においても貢献できるものと考えられる。

（丸山・三橋 明海大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第1会場 〕

EPA 外国人看護師候補生の国家試験学習プロセスに関する縦断的研究

嶋ちはる

本研究では，EPA で来日した外国人看護師候補生が研修先の病院で研修担当者と実際にどのように国家試験対策に取り組んでいるのか，その結果どのような学習プロセスを経ているかについて長期的な観察をもとに報告する。筆者は 2010 年の 6 月から継続してある受け入れ病院でフィールドワークを行っており，仕事や勉強場面でやりとりの観察やビデオ録画，EPA 看護師や彼らを取り巻く人々からの聞き取りなどを主なデータとして収集している。分析には様々なデータの中に共通して繰り返し見られる特徴的な現象をもとに理解を進めていくというエスノグラフィー的手法を用いた。本発表では，現段階の分析において観察された（1）漢字語彙習得プロセスの変化（2）問題解決のために EPA 看護師，研修担当者双方で用いられる種々のストラテジー使用について報告する。同時に，国家試験の影響について，候補生の日本語力の偏りや，アイデンティティー構築の観点から検討する。

（ウイスコンシン大学マディソン校大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 2 会場 〕

母語話者の情報とり方略に非母語話者との接触経験が与える影響に関する質的分析

- 非母語話者からの「援助要求発話」に対する反応を中心に -

柳田直美

本研究の目的は、母語話者が非母語話者から情報を受け取る際に用いるコミュニケーション方略「情報とり方略」、特に、非母語話者からの援助要求に対する反応に着目し、質的な分析を行って、日本語教育の知識や経験を持たない母語話者の情報とり方略に非母語話者との接触経験が与える影響の一端を明らかにすることである。分析データは、上級日本語学習者（女）1 名と非母語話者との接触経験の多い母語話者（男女各 1 名）会話、接触経験の少ない母語話者（男女各 1 名）の会話、計 4 会話で、母語話者が情報を受け取る場面で行われる母語話者と非母語話者のやりとりである。質的分析を行った結果、量的分析だけでは十分に明らかにできなかった、1)援助要求発話に対する反応には多様性があること、2)接触経験の多い母語話者は接触経験の少ない母語話者と比べ、共話的に会話を進行すること、の 2 点を明らかにした。

（早稲田大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 2 会場 〕

英語母語日本語学習者のスタイル変項の習得と切り換え要因

今村圭介

本発表では、英語を母語とする日本語学習者が、スタイル変異の状態にある項目（スタイル変項）の特定変異体の使用と切り換えに至る要因を明らかにする。学習者の使用する変異体と切換えを見るために、学習者が持つ日本語使用機会でも最もスタイルに差が付くであろう二場面（年上・異性・初対面の相手との会話 対疎場面 と同年代・同性・友人・同所属集団の相手との会話 対親場面）を設定し、談話の収録を行い、切り換えの記述を 6 名の中・上級英語母語話者に対して行った。その上で、学習者の変項に関する意識の詳細なフォローアップインタビューで、特定の変異体の使用と切り換えに至る過程を明らかにした。結果として、英語母語の学習者は、周りのインプットや、日本語母語話者の指摘などを元に基本となる一つの変異体を習得した上で、学習者が感じる場のフォーマリティーに応じて、待遇的に高い形式・標準形式に切り換えようとする事が分かった。

（首都大学東京大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第2会場 〕

日本語学習者の談話展開

- 共話スタイルに着目して -

三橋麻子

本研究は、国立国語研究所学習者会話データ(OPI 判定つき)を用い、上級と判定された日本語学習者とテストの日本語母語話者の会話文字化データを分析資料とし、水谷(1988)で述べられた日本語の話し方の特徴である「aizuchi」、「finish up」、「leave unsaid」の共話スタイルが、談話内でどの程度見られるか、また、相互作用としてどのように展開されているのか検証し、両者の違いを考察したものである。

調査の結果、「aizuchi」、「finish up」、「leave unsaid」それぞれに使用数と発話内容に差が見られた。また、相互作用の展開として、「leave unsaid」(発話者)と「finish up」(受け手の発話者)の組み合わせを考察したところ、相互作用の展開がしっかりとされているものと、されていないものが見られた。この要因として、日本語学習者が相手話者の発話の「leave unsaid」の理解に欠け、「finish up」の形で談話が展開されないことが観察された。また、「leave unsaid」と「finish up」間で新たな談話構造も見られた。

(明海大学)

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 2 会場 〕

日本語ビジネス（式辞）スピーチの構造
- 日本語パブリックスピーキングのジャンルとして -

深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子

本発表は、現行の日本語教育で漠然と指導が行われてきた口頭発表教育を、「日本語パブリックスピーキング」という枠組みでの捉え直しが必要だとする問題意識を持つ。基礎研究の一つとして、実際のビジネス（式辞）スピーチを取り上げ、Swales(1990)のジャンル分析（話者の表現意図をムーブ、ステップの単位で分析）を用い、構造の特徴や他のジャンルとの違いを明らかにした。その結果を以下に記す。

1) 式辞スピーチの「主題部」は、話題の場の現状報告を行い、希望を提示し「結び」に入る流れがある。2) 式辞スピーチの「導入」・「結び」部分には進行を表すステップの種類が多いが、「主題部」には少ない。3) 「導入」や「結び」に頻出する感謝表示や謝辞のステップが「主題部」にはあまりない。4) 「導入」と「結び」の部分にジャンルの決め手となる定型が多く使用され、「主題部」では定型ではなく、話し手の個性が現れる内容が選ばれている。

（深澤 金沢大学，ヒルマン小林 元北星学園大学）

〔2011年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第2会場 〕

韓国人観光ガイドの日本語案内の分析

李奎台

韓国人観光ガイドの観光案内に関する研究の殆どは観光ガイドの実際の観光案内場面を対象としたのではなく、観光客に対する質問紙調査を分析した研究である。そのため、具体的にどのような点が観光客とガイドのコミュニケーション上、問題になっているのかが指摘できなかった。

本研究では、韓国人観光ガイドが実際に日本語で観光案内しているときの様子を録音、録画したデータを研究対象とした。実際の観光客とのコミュニケーションが行われている観光案内場面を分析し、その結果に基づいて観光案内のコミュニケーションにおける問題点を指摘している点で、従来の研究と異なる。そして実際の韓国人観光ガイドの日本語案内の中で、どのようなコミュニケーション要素が働いているのかを分析し、ポライトネス理論の観点から考察を行う。それによって、これからの日本語教育へ提言することを目的とする。

（東京外国語大学大学院修了生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第2会場 〕

中級日本語学習者の助詞と動詞の誤りに対するリキャストの認識

- 刺激回想インタビューの分析を通して -

菅生早千江

本研究では、学習者のリキャストの認識が助詞と動詞で異なるかを刺激回想法を用いて調査した。対象者は中級日本語学習者 7 名である。助詞と動詞部分の誘出を意図した物語叙述タスクを実施し、誤りにはリキャストで対応した。タスク終了後、タスクの録画ビデオを用いて刺激回想インタビューを実施した。助詞と動詞に対するリキャストの回想コメントを、Egi（2010）の枠組みに従い「ギャップの認識」、「訂正の気づき」、「その他」に分類した。

その結果、回想コメントに見られるリキャストの認識は、誤りが動詞か助詞かにより有意に異なった。動詞は訂正に納得するコメントが多く、助詞に対するリキャストは、誤りの指摘に気づいても、ルールの意識化につながらないコメントが多かった。このことから、動詞部分へのリキャストは、意味と機能を文脈の中でマッピングする機会となり効果的であるが、助詞へのリキャストはルールの再構築には至らない可能性が示唆された。

（お茶の水女子大学大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 2 会場 〕

アウトプットは学習者の誤用の質的变化を促進するのか

- イ形容詞否定形の場合 -

荻野雅由

本研究の目的は、述部のイ形容詞否定形の習得に焦点を当て、学習者の誤用と、誤用を産出した際にフィードバックを受けて修正した発話 (modified output) との関係調べることににより、アウトプット仮説 (Swain, 1985, 1995) を検証することである。

ニュージーランドの大学の初級レベルの 28 名の日本語学習者を modified output を産出する機会のある実験群と機会のない統制群に分け、誤用の変化を事前テスト、直後テスト、遅延テストにおいて比較した。統制群の誤用には大きな変化が見られなかったが、実験群は事後テストにおいてより習得段階に近いとされる誤用を多く用いるようになった。この結果は誤用に対するフィードバックと modified output の産出のコンビネーションが中間言語の変化を促したと考えられ、アウトプット仮説を支持するものとなった。

(カンタベリー大学)

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第2会場 〕

日本語能力試験の点字冊子作成における留意点

- 漢字を含む語彙・表現を点訳する際に配慮すべきこと -

込宮麻紀子・藤田恵・河住有希子

日本語能力試験は受験特別措置として点字冊子試験を行っている。表音文字の点字は、漢字仮名交じり文よりも表記から得られる情報が少ない。よって試験の公平性を保つためには点訳の際、特別な配慮を要する。本研究では、読解文に用いられる漢字を含む語彙・表現を分析し、配慮すべき内容の枠組みを示す。

読解問題を作成する際、当該レベル以上の語彙・表現には注釈を付加するが、「漢字から類推可能」として省略する場合もある。しかし点字冊子では慎重な対応を要する。旧試験から「漢字から類推可能」と判断された語彙・表現を分析したところ、A．同音異義語があり文脈からは適当な意味が選択できないもの、B．短縮表現、C．読み方が当該漢字の音訓に含まれないもの、音変化が起こるもの、D．語の親密度が非常に低いもの、があることが分かった。今後はこの枠組みに沿って、各特性に応じた注釈の付け方や適当な注釈の量などを検討する必要があるであろう。

（込宮・藤田・河住 （財）日本国際教育支援協会）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第3会場 〕

本物の発信者を目指した活動型授業の実践

近藤有美・川崎加奈子

近年，大学での教育が，学習項目の詰め込みから，人間育成へとシフトし始めている。その観点から，本実践では，学部留学生を対象に，祭り（長崎くんち）の見学準備，祭りの見学，ブレインストーミング，グループ討議及び発表準備，発表，振り返り（記述式），という流れで活動を行った。

「自分の目で見て，感じ，それを伝える」という本実践の活動を通して，「問題発見探求能力」，「自律的学習能力」，「他者からの学習協力能力」，「自己表現能力」の育成の兆しが見られた。これは，学生が実際に祭りを見たことで探究心がかきたてられたことや，グループ活動において学生同士が学び合ったことによるものであろう。複数の学生の振り返りに，活動中の苦労を通して喜びや満足感を得たことが記されていた。また，「発表する / 発表を聞く」活動を通して，「伝わる」とは何かを学生たち自身が学び取ったことも，学生の振り返りから窺えた。

（近藤・川崎 長崎外国語大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第3会場 〕

日本語のクラスはいかにして実践共同体となるか

- 「イベント企画プロジェクト」を対象とする3学期にわたるアクションリサーチ -

古屋憲章・古賀和恵・三代純平

発表者らは、学習は共同体に生起するという学習観に基づき、「イベント企画プロジェクト」という教育実践を3学期にわたり継続してきた。「イベント企画プロジェクト」とは、学習者がイベントを企画・実施する活動を通して、社会参加に必要な総合的コミュニケーションを体験的に学ぶという教育実践である。本研究では、実践共同体の構築という観点から、3学期分の教育実践を記述、考察し、「イベント企画プロジェクト」のクラスが実践共同体となるプロセス、及びそのプロセスで学習者が実感していた学びを明らかにする。記述、考察の結果、「イベント企画プロジェクト」のクラスは、1)実践の共有、2)当事者意識・協働意識の共有、3)文化の共有というプロセスを経て実践共同体となったこと、そのプロセスで学習者は、他者の受容、協働、コミュニケーション能力の向上、異なる背景を持った他者との交流を学びとして実感していたことが明らかになった。

（古屋・古賀 早稲田大学，三代 徳山大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第3会場 〕

米大学日本語カリキュラムでのアカデミック・ジャパニーズへの取り組み
ディベートを通して

小山信子

アカデミック・ジャパニーズをより具体的にディベートや討論が出来る日本語能力と狭義し，米大学日本語カリキュラムにディベート導入を試みてきた。ケーススタディとして2009年度日本語上級コースでの取り組みについて検証する。ディベート導入を試みた結果，その準備段階で以下4つの変化が学生の発話表現と意識に見られた。(1)意見表明表現の特徴である「～と思う」「～と考える」が，学生の発話に頻出するようになった。(2)ディベート独特の表現(主張・主張の裏づけ・資料の引用など)をディスカッションで活用出来るようになった。(3)「～(だ)けど・けれども」という逆接副詞節を，反論または，相手の意見に言及する表現として発話に取り入れながら，自らの意見を主張する言い方が出来るようになった。(4)自らの意見を優位に展開するためには，日本語力のみならず「準備・下調べ」が大切であると，学生のほとんどが実感していた。

(テンブル大学ジャパンキャンパス)

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第3会場 〕

日豪大学間における短期留学

- 4 大学の事例から -

橋本博子・青木尚美・飯田純子

発表の目的は、豪州の大学から日本への短期留学送り出しの現状、単位互換の際に問題になる日豪のカリキュラムの違い、短期留学生を日本に送る上での以外の阻害要因を明らかにすることである。本発表では、豪州の総合研究大学4大学のデータと、各大学の担当者が留学中や帰国後の学生から得たフィードバックなどにもとづいて現状を分析し、豪州から日本への短期留学における課題を考察する。本発表の意義は、日本で国際化に力を入れている大学の短期留学プログラムを、外の視点から分析することにある。日豪の大学生交流に関する豪州からの分析として、日本の大学の留学生受け入れや日本語教育への発信としたい。なお、本研究については共同研究者として石原俊一氏（オーストラリア国立大学）の協力を得た。

（橋本 モナシュ大学，青木 アデレード大学，飯田 ニューサウスウェールズ大学）

初級レベルの日本語教育における「～がる」の指導

韓金柱

本発表では、感情形容詞の語幹に「がる」をつけ動詞化した形「～がる」（「悲しがる」等）という表現を、初級レベルの日本語教育においてどのように提示し指導すれば、その意味と使用される特徴的な文脈を的確に示すことができるかについて考察することを目的とする。

「～がる」という表現は「話者が、対象となる人物の外的な様子をその人物の内面に関係付けてとらえる」際に用いられる。それが典型的に観察される文脈の例として、「明るい性格であるXさんが、部屋から出てこないまたは暗い顔をしている場面」「子供がおもちゃ売り場で泣いている場面」「学生が先生に間違いを訂正されただけで、すぐ涙ぐんだりする場面」など、対象となる人物が「普通または周りの人と違う様子を見せる」という文脈が挙げられる。このような典型的な文脈で「～がる」という表現を提示し指導すれば、その意味と使用される特徴的な文脈を的確に示すことができると思われる。

（東京外国語大学大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第3会場 〕

初期指導から読みへの橋渡し

- 交換日記を通した活動 -

平田昌子

初期指導を終え，読みの活動に入る際，そのステップが大きく，躓いてしまう子どもたちが少なくない。読みの活動への入り口は，子どもたちが心から読みたい，知りたいというものでなければならぬと思われる。そこで，本研究では，友人との交換日記を用いた活動を提案する。

日記という特徴からも，子どもたちの生活に密着した内容となり，文体も会話体に近いため，生きた文脈の中で読みの活動への第一歩を踏み出すには有効であると考え。産出されたコメントを基に「話題について触れているか」「友人からの問いかけに返答しているか」「自ら友人に問いかけているか」の3項目に着目し，分析を行う。調査協力者の読みへの姿勢，読み取る力の変化を明らかにし，主体的に読みの世界への第一歩を踏み出せるような支援方法を提案することを目指す。

（桜美林大学大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第3会場 〕

JLC日本語スタンダードに準拠した教育

- 口頭表現を中心に -

大山理恵・坂本恵

東京外国語大学留学生日本語教育センター作成の「大学，大学院での教育のための日本語習得」を目標にした「JLC日本語スタンダード」を海外での大学院後期課程進学の予備教育に応用した方法，注意点，その結果を，口頭表現教育を中心に考察する。この期間の目標を「ゼミや研究室での日本語による議論が可能であること」とし，自分の専門についてわかりやすく話ができること，自律的な日本語学習ができることなどの行動目標を立てた教育を行った。具体的には，文法にかかる時間を減らし，初級後半から技能別の時間を設け，各技能を連携させ，統一的な学習を目指した。この中で口頭表現の授業については，最終的な成果発表として「自分の専門についてわかりやすく述べる」スピーチを課し，手順を踏んだ指導を行い，結果を得た。スタンダードに基づく統一的な目標を目指す教育，それを反映した口頭表現教育の意義について考察したい。

（大山（独）日本学生支援機構大阪日本語教育センター，坂本 東京外国語大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第3会場 〕

学習者の自律性を高める初級日本語コースの試案

- "Can-do statements"シートによる自己評価が習得に与える影響について -

三浦香苗・松田真希子

近年，日本語教育は JF スタンド等，CEFR の理念に影響を受け，学習者の自律性を促し，協働学習する教育形態が模索されている。本発表では，現状の教育資源を用いつつ自律学習の理念を取り入れた初級日本語コースの試案として Can-do statements シートによる自己評価の導入とその効果について述べる。まず『みんなの日本語』の各学習項目から教師が Can-do statements をリスト化したシートを作成し，学生に定期的に評価させた。併せて客観的な成績評価（筆記・口頭・聴解試験）を，同レベルの成績でスタートした過去のコース期生の成績と比較した。その結果，学習期間が長くなるにつれ，Can-do statements シートで自己評価を続けた受講生は過去の受講生の成績平均よりも上回ることが確認された。

なお，本研究については共同研究者として笹原幸子氏，高木佳奈氏（金沢大学）の協力を得た。

（三浦・松田 金沢大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第4会場 〕

日本語とシンハラ語の授与補助動詞文

- 前項動詞と文の意味から見えてくるもの -

宮岸哲也

日本語では多様な動詞が授与補助動詞形式（テアゲル/テクレル）をとり，行為の恩恵性を表す。シンハラ語も同様の形式（la denawa）を持つが，主体の状態変化，精神的な活動，主体の移動，人・事物に対する働きかけや態度を表すような動詞は，この形式を取れない。またこの形式を取れる動詞でも，対応する日本語授与補助動詞文と意味的な違いが生じる場合や，モノの移動の意味が文に含意されるか否かで適格性が異なる場合もある。本発表では，日本語では適格なのに，対応するシンハラ語では不適格になる例や，双方で意味がずれる例を示しながら，シンハラ語母語話者にとって分かり易さに違いが出る日本語授与補助動詞文があることを指摘し，テクレルとテアゲルの使い分け以外にも，日本語授与補助動詞文の習得上の問題があることを主張する。

（安田女子大学）

〔2011年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第4会場 〕

日本語の学術共通語彙（アカデミック・ワード）の抽出と妥当性の検証

松下達彦

学術共通語彙とは、一般テキストに比べて学術テキストでより高い使用率を占める語彙である。分野を問わずに高い使用率を示す点が専門語彙と異なる。留学生にとっては、初級語彙に次いで重要な語彙である。本研究では国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ（2009年版）の書籍部分に基づき、対数尤度比を指標として日本語の学術共通語彙，4レベル，計1788語を抽出し，妥当性を検討した。レベル1の565語をテストコーパスにかけた結果，会話，ベストセラー，エッセイにおけるカバー率が1～3%だったのに対し，各分野の専門テキストでいずれも約11%と高く，英語の Academic Word List (Coxhead, 2000) の570語と類似の値を示した。よって本リストは妥当かつ効率的なリストだといえる。本リストは発表日直前に発表者のウェブサイトに掲載し，誰でも利用できるようにする予定である。

（Victoria University of Wellington 大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 4 会場 〕

初中級学習者の複文再生力

- 文末表現を中心とした検証 -

萩原章子

本研究では，初中級の学習者が複文に含まれる動詞ならびに文末表現を聞き取り再生する能力を調査した。留学生として日本語を学ぶ 13 名の学習者を対象に，誘導模倣の手法を用い複文の産出を困難にしている要素を明らかにするための実験を行った。刺激文は複文の第一節と第三節にそれぞれ「つもりだ」「予定だ」「かもしれない」「た方がいい」「なければならない」「意思形+と思う」のいずれかを含んだ。動詞語彙の選択，動詞活用，文末表現の再生率はそれぞれ文内の位置によって変化するか否かを中心に検証した。検証の結果，第一節内の動詞活用部分は，第三節内の動詞活用部分より正確に産出され，統計的な有意差が認められた。文末表現別に検証すると，「つもりだ」を除き全て第一文節内の方が第三文節内より正確に産出された。今回の実験により，初中級の学習者にとって処理が困難なのは，文末に近い部分の動詞活用と文末表現だという傾向が確認された。

（国際基督教大学）

[2011 年度日本語教育学会春季大会 (東京国際大学 , 2011.5.22) 研究発表・口頭発表要旨 第 4 会場]

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』コアデータにおける初級文法項目の出現頻度

森篤嗣

本研究では大規模コーパスを用いて「(書き言葉で)日本語母語話者が、実態としてどれくらい当該の文法項目を使っているか」を明らかにする。本研究で扱うのは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ(2009年度版)のコアデータ(934,655語)である。これを用いて、庵ほか(2003)を基準に、34分野の延べ223の初級文法項目の出現頻度を算出する。ただし、出現頻度は重要度の数ある指標の一つに過ぎず、出現頻度が初級文法項目の取舍に直結するわけではない。

結果について一例を挙げると、格助詞(9つ)の出現頻度は11.272%で、Yahoo!知恵袋・白書・書籍・新聞のいずれにおいても10%前半から12%前半と安定して出現する。最多は二の2.977%で、ラが2.696%、ガが2.016%と続く。最少はヨリで0.054%であった。他には、ノが4.520%、テイルが0.816%、テアルが0.015%、テミルが0.036%、使役(セル+サセル)が0.091%、条件接続詞(ト+バ+タラ+ナラ)が0.420%であった。テアルや使役の出現頻度の少なさは注目に値する。

(帝塚山大学)

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第 4 会場 〕

香港における成人日本語学習者の学習継続プロセス

- 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるインタビューデータの分析から -

三國喜保子

本研究は、香港の成人日本語学習者の学習継続に焦点を当て、学習継続に対する学習者の認識とそれに関わる諸要因の関連から、学習継続のプロセスを明らかにすることを試みた研究である。香港の民間日本語教育機関において日本語を学習中、あるいは学習していた経験をもつ成人 10 名を対象にインタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用し、分析を行った。分析の結果、香港の成人日本語学習者の学習継続は、＜身近な「日本」＞の存在や＜学習の成果＞など他者との関わりの中で支えられながら、学習への＜積極的な関与＞を行い、＜悩み、迷う体験＞をしながらも学習者一人ひとりが＜自己の理解＞を深め、更新していくプロセスであることが明らかになった。この結果から、香港の成人学習者にとっての日本語学習は、単なる言語の学習にとどまらず、学ぶことにより自己の理解を深め、自己決定学習（ノールズ 2002）を促していることを指摘した。

（桜美林大学大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第4会場 〕

N I E 授業が学習者に与える効果について

- 学習意欲と学びの変容を分析する -

宮弘美

本研究は、学習者が新聞を活用するN I E（Newspaper In Education）授業を体験することによって、それまでの日本語の学習意欲と学びが学習者の中でどう変わるのかを研究課題としている。研究の目的はN I E体験者へのインタビュー - 調査を通じて、学びの変化、とりわけN I Eへの取り組みや関与の仕方によって生じる自己変容をインタビュー - データから分析することで、N I E授業が学習者にどんな効果を与えるかについて考察することである。

N I Eに積極的だった上級学習者1名へのインタビュー - データを精査し、分析した結果、最も効果的だった学びは批判的な読みの習得と文章構成力の向上であることがわかった。かつての内容把握中心の読解授業とは違うN I Eのアプローチは自主的に、かつ新聞を丸ごと使うことが特徴で、問題発見解決学習の1つと考えられる。N I Eの取り組み方によって言語能力にとどまらない社会力ともいべき「考える力」の育成にN I Eの有効性が示せると考える。

（東京国際大学附属日本語学校）

[2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・口頭発表要旨 第4会場]

日本語専攻学習者の第二言語不安に関する調査

- 演劇的活動による不安変化を焦点として -

姚瑶

本研究は、中国の大学における日本語を専攻とする学習者を対象に、演劇的活動を通して第二言語不安の変化を調査したものである。これまでの多くの実証的研究により、不安が言語習得や学習の継続に負の影響を与えることが明らかにされているが、具体策による第二言語不安の変化を測定する研究が限られている。そこで本発表では、演劇的活動が第二言語不安の緩和に効果があるのかを明らかにすることを目的とした。

調査では、学習者（3年生）を実験群13名と統制群14名に分けて事前質問紙調査を行った。実験群の学生を対象として、ドラマ再現演劇（『ビューティフルライフ』）の活動を行った。実験群と統制群の学習者に事前質問紙と同じアンケート調査及び自由記述を行った。

質問紙は教室内不安調査と教室外不安からなっている。分析はt検定を用いた。調査の結果、実験群は統制群の学習者と比べ、教室内不安数値と教室外不安数値が両方とも有意に減少することがわかった。実験群学習者の自由記述から見ると、モチベーションの波が見られたが、活動に対する全体的な評価が高い。

以上の調査から、演劇的な活動の有効性を数値で証明できたとと言えるであろう。学習者のモチベーションの波をどのように利用して活動を展開するのかを検討する必要がある。

（九州大学大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第1会場 〕

「やさしい日本語」の普及に向けて
- 自治体職員を対象とした研修を事例として -

米勢治子

発表者は「やさしい日本語」の運用に向けた職員研修において、(1) 通訳や翻訳ができる言語数には限りがあり、「やさしい日本語」は多言語対応を補うものでもあること、(2) 「やさしい日本語」での対応は外国人への一定レベルまでの日本語学習機会の保障を伴うこと、(3) 「やさしい日本語」の普及は日本語学習のモチベーションとなることなどを挙げ、既存の文書から「やさしい日本語」への変換や、窓口でどう対応するかを考えるワークショップを試みた。

これらの研修を通して、「やさしい日本語」への変換について理解を深め、地域日本語教室は日本人住民にとって「やさしい日本語」を運用するための恒常的な研修の場となることなどの気付きを得た。今後は、多文化共生社会の基盤づくりの一助として、自治体職員やその他の市民を視野に入れた地域日本語教育のネットワーク構築や「やさしい日本語」の日本人市民への普及をはかりたい。

（愛知県立大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第 1 会場 〕

在籍級への入り込み支援における母語支援者のスキャフォールディング

清田淳子

海外における言語少数派生徒の教科支援では「教師と同級生に支えられながら英語（＝第二言語）を話す籍級に浸かる」（ハモンド 2009）ことの重要性が指摘されているが，国内では在籍級を取り上げた研究は僅かである。本研究では入り込み支援を行う母語支援者のスキャフォールディングを明らかにし，入り込み支援の可能性を探った。入り込み支援は来日 4 カ月の中学生 1 名を対象とし，子どもの母語を用いて支援を行った。分析の結果，支援者の 在籍級の授業の内容理解を促す， 在籍級の学習活動に必要な日本語表現や振る舞い方を教える， 学習ストラテジーや学習習慣の形成を促す， 子どもに安心感を与える， 在籍級教師や日本人生徒との仲立ちの役割を果たす， というスキャフォールディングが確認された。また，支援者は自らも教材研究をし，子どもの言語レベルや内容理解の状況を把握した上で入り込みを行う必要性が示唆された。なお，本研究については共同研究者として劉雲霞氏（お茶の水女子大学大学院生）の協力を得た。

（立命館大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第 1 会場 〕

EPA 介護福祉士候補者と教師の学びの連環

- 漢字学習を例に -

大関由貴・遠藤郁絵

発表者は、2010 年度インドネシア EPA 事前研修を担当した。EPA 候補者は国家試験受験に限らず職業人としての継続的な学びが求められ、事前研修ではそのための自律学習能力の育成が目標の一つとされた。本発表では漢字学習を例に、そこでの自律学習の取り組みの様相と自律学習能力の育成について、具体的なデータをもとに報告することを目的とする。授業では、候補者の言動の観察から教師に気づきが生じ、それにより教室活動が変化し、新たな学びが生み出されるという連環した学びが起きていた。これらの過程で生じた学びの内容を分析すると、そこで自律的な学びが実践されていることがわかった。

自律学習能力の育成を考える際、教師は目の前で起こる学習の過程を観察し、教室の参加者全員でその過程を共有していくことが重要である。それにより、自律的に学ぶことの良さや重要性が自ずと実感され、共同体の中で価値づけされていくのではないだろうか。

（大関・遠藤（財）海外技術者研修協会）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第 2 会場 〕

初級から初中級の学習者における読みの変容

熊田道子

初級～初中級の読解における問題点として、1)学習者が接する日本語の文章が短いこと 2)漢字圏・非漢字圏の学習者が混在して読解を行うため、非漢字圏の学習者がストレスを感じやすいこと の二つが観察される。

上記の問題解決の一つの試案として、本発表では、学習者の「自由読書」を提案する。「自由読書」とは、学習者に何の制約も与えず、好きな文章を自分の好きなスタイルで読ませることを指す。

90 分×15 コマの授業を通し、学習者の読みに対する変容を追ったもの（インタビュー・読書シート・アンケート）を分析対象とした。対象者は、日本の大学で学ぶ留学生（別科・学部・大学院等）で、アジア・ヨーロッパ・アメリカ・オセアニアなど様々な背景を持つ。

結果として、多くの学習者が、読み能力の向上と、漢字能力の向上、読みへの楽しさを挙げ、特に非漢字圏の学習者は読みへの不安が軽減されたと感じていた。

（早稲田大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第 1 会場 〕

文章難易度に寄与する構文の自動検出システムの開発

内田聖也・北村達也・川村よし子

本研究は、自然言語処理技術を利用して日本語学習者にとって難しいとされる構文を検出し、教師や学習者への情報提供や文章難易度評定に利用することを目的とする。今回主に検出する対象は主格省略文である。これは、「あの人は顔がこわいので声をかけにくい。」のように 1 つ以上の主格が省略された文である。読者は省略された主格を適宜補って読み進める必要があるため、文の難易度が高い。本研究では構文解析システム KNP を用いて主格が省略されている述語を自動的に検出する技術を開発した。主格省略文の他にも名詞修飾節，連用形・テ形の連用中止表現法の検出についても検討した。本研究で開発するシステムはインターネット経由で Web ブラウザから利用することができる。

(内田 甲南大学学生，北村 甲南大学，川村 東京国際大学)

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第 1 会場 〕

web 公開予定文法用例検索システム『日本語文法項目用例文データベース』の文法項目選定について

堀恵子・江田すみれ

web 公開予定文法用例検索システム『日本語文法項目用例文データベース』は、主に日本語教育の教師支援を目的として、初級から上級までの文法項目の用例文を、口頭表現と文章表現のコーパスから抽出し、目視による用例のチェックとタグ付けを行い、データベースを作成した上で、web 上で検索可能にしようとするものである。さらに、表現形態と改まり度、小説・白書といった分野の違いによる使用実態がわかるように、各コーパスの出現頻度情報も提供する。このような目的のために、どのような文法項目を取り上げるべきか考察した。

助詞、助動詞の用法に関しては国立国語研究所(1951)を参考にした。複合辞に関しては、グループジャマシイ(1998)、国立国語研究所(2001)収録の付表を参考にし、そこで共通に取り上げられている項目を中心に選定した。現在 1414 項目を見出し語とするが、今後調査の中で増減することもあり得る。

（堀・筑波大学，江田・日本女子大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第 2 会場 〕

外国人介護従事者の日本語能力測定バンドスケールの開発について

宮崎里司・中野玲子・早川直子

「外国人介護従事者の日本語能力測定バンドスケール」(Foreign Care-Workers Band Scales) は外国人介護従事者の「日本語による業務遂行能力」を測定するツールである。四つの課題， Japanese for specific purpose である介護の日本語を測定する，日本語能力ではなく「日本語による業務遂行能力」を測定する，現場によって担当業務が異なり，一律では考えられない能力を測定する，非日本語教育専門家である介護従事者にも使用可能なツールにすることを検討し開発された。スケールは「業務場面」，「生活場面」，「国家試験対策場面」の 3 場面がそれぞれ 8 段階に分かれている。非日本語教育専門家も評価作業に参加し，外国人介護従事者の能力の到達度を把握することで，主体的な日本語教育の設計者になり，育成型移民政策のモデルの構築に寄与する意識づけが期待される。なお，本研究については共同研究者として奥村恵子氏（早稲田大学日本語教育研究センター）の協力を得た。

（宮崎・早川 早稲田大学，中野 すみだ日本語教育支援の会）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第 2 会場 〕

介護福祉士候補者向け集合型集中日本語研修の成果と課題

- 国家試験対策のための読解力・語彙力養成を中心として -

平田好・神吉宇一

本発表は、国の事業として 2010 年度に実施された EPA（経済連携協定）介護福祉士候補者向け集合型集中日本語研修の成果と課題を報告し、国家試験対策の語彙力・読解力養成について議論を深めるためのものである。研修は、夏冬計 2 回、各 2 泊 3 日の合宿で、第 1 陣（2008 年度来日インドネシア人 104 名）、第 2 陣（2009 年度来日インドネシア人 189 名、同フィリピン人 217 名）候補者全員を対象として、日本語演習、国家試験模擬試験及び解説を行なった。効率的に国家試験頻出語彙を習得し、試験問題内容を速やかに把握できるようになることを目指した。2010 年 12 月に実施した第 2 回研修では、社会保障制度に関する分野に焦点を絞り、国家試験過去問題を材料とする読解演習や、専門分野の講義と連動する語彙演習を実施した。この研修の考え方や開発した教材を明らかにすることによって、今後の国家試験対策の可能性について考察を続けたい。

（平田 元(財)海外技術者研修協会，神吉 (財)海外技術者研修協会）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第 2 会場 〕

インドネシア人 EPA 看護師・介護福祉士候補者日本語研修の取り組み

- バンドンにおける研修を中心に -

布尾勝一郎

2008 年に始まった日本・インドネシア経済連携協定（EPA）に基づく看護師・介護福祉士候補者の受け入れは 3 年目を迎えている。候補者らは、日本での就労開始前に 6 ヶ月の日本語研修を受けることが両国間協定で定められており，2010 年度は，当初 2 ヶ月はインドネシアで，その後の 4 ヶ月は日本で研修が行われた。

AOTS は，インドネシアのバンドンにおいて，インドネシア教育大学の協力を得て 2010 年 6～8 月の 2 ヶ月間，115 名の候補者に対して日本語研修を行った。その後は日本に場所を移し，AOTS 単独で 4 ヶ月間研修を継続した。本発表では，6 ヶ月研修の全体像を示すとともに，とりわけインドネシアでの研修に焦点を当て，インドネシア人講師と日本人講師の研修へのかかわりや，インドネシアと日本で一貫した研修を実施するために行った取り組みとその成果を報告する。実践報告を通して，広く EPA の課題について考える機会としたい。

（（財）海外技術者研修協会）

〔2011年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第2会場 〕

「標準的なカリキュラム案」に基づく日本語ボランティア養成・研修講座の課題

吉田聖子

2010年度中に企画，実施された「生活者としての外国人」に対する標準的なカリキュラム案に沿った日本語ボランティア養成・研修講座のうち，地域性を大きく異にする3か所の講座を取り上げ，それぞれの講座を組み立てと実施内容，主催者と専門家，現場の連携の頻度と内容，受講者のフィードバック以上3つの要素の比較検討を行った。ここから導き出された3つの共通項と留意点について発表する。

今回「標準的なカリキュラム案」ができたことによって，多くの講座主催者が養成プログラムの見直しを検討し始めている。この時期に「標準的なカリキュラム案」に沿った養成講座の組み立てに関する課題を整理し分析することは，今後の養成講座のあり方を考えるうえで，多くの人の参考になると考える。

（東京外国語大学）

[2011 年度日本語教育学会春季大会 (東京国際大学 , 2011.5.22) 研究発表・ポスター発表要旨 第 2 会場]

クラス活動としての「ライフヒストリー・インタビュー」の意義

- 学習者の経験と学びの質的分析による考察 -

長嶺倫子・古賀和恵

クラス活動としての「ライフヒストリー・インタビュー」(以下 LHI) の実践において、学習者はどのような経験をし、どのような学びを得ているのかを質的に分析した。分析の結果、以下の点が明らかになった。学習者はライフヒストリー(以下 LH) を書くことの意味や面白さを見出し、オリジナリティある LH を描いていくことを目指すようになっていった。また、日本語や自分の書いたものへの誇りと自信を持つようになり、クラスメートと協働したことに意味を見出すに至っていた。さらに、インタビュー相手の新たな一面への気づき、LHI を扱った読み物教材からの学びを得ていた。以上の経験や学びは、クラス活動に関わる様々な他者との言葉を介した相互作用によってもたらされたものであり、それは、学習者が自己の価値観を見つめ直すきっかけにもつながっていた。ここに日本語教育、さらには言語教育においてクラス活動としての LHI を行う意義を見出すことができる。

(長嶺・古賀 早稲田大学)

[2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第2会場]

上級日本語聴解指導におけるディクテーションの有効性

- Moodle を活用したブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて -

篠崎大司

筆者は、これまで上級者向け聴解ブレンディッドラーニングモデル（以下、BL モデル）を構築しその有効性を検証してきた。その結果、学習者による授業評価では高い有効性が示された。しかし、模擬試験の成績においてまだ十分な教育効果は得られていなかった。その原因の一つに語音レベルの聞き取りの不徹底さが考えられた。そこで本研究では、これまでの e コンテンツに新たにディクテーションを追加し BL による授業を实践、ディクテーションを実施しなかったクラスと実施したクラスの、BL 実施前後の模擬試験の結果からその有効性を検証した。

その結果、ディクテーションを実施しなかったクラスにおいては教育効果の向上は見られなかったが、実施したクラスにおいては 16.3 ポイント、伸び率にして 42.4% の伸びを示した。このことから、上級者に対する聴解指導においては、内容理解型のタスクだけではなくディクテーションを通じた精聴指導が有効であることが示された。

（別府大学）

[2011 年度日本語教育学会春季大会 (東京国際大学 , 2011.5.22) 研究発表・ポスター発表要旨 第 3 会場]

アニメ・マンガに現れる日本語の特徴

- 海外で人気のあるジャンル別比較 -

川嶋恵子

現在, 日本のアニメ・マンガは世界中の若者の人気を集めており, 日本語学習者の多くがアニメ・マンガをきっかけに日本語を学び始めるとも言われている。国際交流基金関西国際センターでは, アニメやマンガに現れる表現や用語を楽しく学べる e ラーニングサイト「アニメ・マンガの日本語」 (<http://anime-manga.jp>) を開発し, 2010 年 2 月に公開した。コンテンツ制作にあたり, 海外で人気のあるジャンル (恋愛, 学校, 忍者, 侍) のコミックから, 出現頻度順に 1000 語ずつのジャンル用語, 100 字のジャンル基本漢字を抽出した。本研究では, 海外で人気のあるアニメ・マンガのジャンルに現れる日本語にどのような言語的特徴があるのかを明らかにすることを目的に, ジャンル用語, 漢字の品詞分布, 旧日本語能力試験出題基準による難易度, 表記上の特徴, 基本漢字の汎用性について分析を行い, 各ジャンルの用語, 漢字の特徴を示した。

((独) 国際交流基金関西国際センター)

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第3会場 〕

4 コマ漫画を題材とした留学生と日本語教員養成課程履修学生との間の協働の学びの可能性

上田安希子・石塚京子・岡本能里子・西島道

発表者らは、2008 年度から同大学に学ぶ留学生の作文クラスと日本語教員養成課程クラスとの間で「作文交流」活動を実践し、異なる学習目標を掲げる授業間での非対面型の協働学習においても、想定外を含めた多様な学びが見られることを示してきた。本発表では、2008 年度後期に行った、同じ4コマ漫画を題材として、双方の学生が作文を書き、コメントを交換し合うという実践を取り上げ、交換された作文とコメントを、交流が進むにつれて各ペアにどのような変化が見られたかに焦点を当て、縦断的に分析した。その結果、1) 留学生が示した漫画に対するマイナス反応への養成課程履修学生からの働きかけとそれによる留学生の変化、2) 漫画のテーマに対する自由な意見交換の中における自己の考えの深化といった、双方向の学びが観察された。この結果に焦点を当て、本発表は、新たな課題による協働学習の更なる可能性と学習環境デザインにおける課題を探求する。

（上田・石塚・岡本・西島 東京国際大学）

[2011 年度日本語教育学会春季大会 (東京国際大学 , 2011.5.22) 研究発表・ポスター発表要旨 第 3 会場]

漢字の自律学習支援を目的とした教材作成とその評価

- マレーシアにおける実践報告 -

内海陽子・加藤綾子

日本マレーシア高等教育大学連合 JAD プログラムの 2008 年度・2009 年度入学生に対し、漢字の自習用教材を作成し、配布した。2008 年度は Microsoft Power Point 2003 を利用して、漢字語彙とその読みを提示するフラッシュカード (以下 FC) を作成した。そして、アンケート調査を行い、自習教材に対する評価と漢字学習に対する意識を調べた。その結果を基に、2009 年度は、書きとり練習用の FC も作成し、英訳と例文に加え、各例文を日本語で読み上げた音声ファイルも付けることにした。さらに、練習問題として、選択・タイピング問題も作成した。以上の改良により、2009 年度版は利用者の 73% が「役に立った」と評価し、2008 年度の結果 (44%) を大きく上回った。漢字学習に対する学生の意識、求められている自習教材をアンケートで調査した結果、より学生のニーズに近い教材を作成することができた。

(内海 東京工科大学附属日本語学校 , 加藤 元日本マレーシア高等教育大学連合 JAD プログラム)

〔2011年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第3会場 〕

上級動詞の用法の学習

- 差異化の認知とその共有化の試み -

茂住和世

学習者にとって語彙の用法の学習は難しい。学部留学生にそれを教師主導でなく学ばせたい。そこで、学習者が自分の文脈で例文を作り、その過程で得られた動詞の用法に対する理解をクラス内で共有することを旨とした授業実践を行った。

まず意味領域の近い動詞を課題として与え、正用文・誤用文・タスクのすべてを学習者に作らせる。それらをプリントにまとめてクラス内でプレゼンする。その際に、誤用文である理由も学習者自身が説明する。最後にその日学習した語彙を空所補充するテストを解いた後、ペアになり互いの解答を確認し合う。以上のような授業を行ったところ、課題動詞の用法の、正用文やタスクだけでは見えてこない差異が誤用例文により学習者個人内に認知され、それがプレゼンを通してクラス内に示され、聞き手の疑問に答える形で共有化がなされた。また、テスト解答を互いに検討することで意味用法が再確認され、ピア・ラーニングの効果も見られた。

（東京情報大学）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第3会場 〕

テスト学習の第二言語の語彙記憶への効果と理論的側面の検討

- 繰り返し学習との比較から -

佐藤智照

近年テストが持つ直接的な記憶促進の効果が注目されている。テストが長期的な記憶の保持に有効となる現象を「テスト効果」と言う。本研究ではテスト効果の第二言語の語彙記憶への効果と「転移適切性効果」と「エラー修正学習」からのテスト効果の理論的説明の妥当性について初級非漢字圏日本語学習者を対象に検討を行った。具体的には対連合学習課題を用いて、学習を2回繰り返す条件(SS条件)と1回の学習の次に学習のためのテストを行う条件(ST条件)の5分後と1週間後の記憶成績の比較から検討を行なった。実験の結果、第二言語の語彙記憶において繰り返し学習よりテストによる学習を行う方が長期的な記憶の保持には有効であり、学習のためのテストでは想起が日本語と英語どちらでもテスト効果が期待できることが示された。また理論的説明では転移適切性効果とエラー修正学習の説明ではテスト効果を説明することはできないことが明らかとなった。

（広島大学大学院生）

〔 2011 年度日本語教育学会春季大会（東京国際大学，2011.5.22）研究発表・ポスター発表要旨 第3会場 〕

中級日本語学習者の作文過程

- 母語使用の観点から -

石毛順子

本研究は，英語母語話者，中国語母語話者，韓国語母語話者における日本語の作文過程の差異を見出すことを目的とした。発話思考法により記録された，作文過程の発話プロトコルの母語部分を石毛（2010）を参考にした思考カテゴリーに当てはめ，分析した。学習者の母語と母語使用の関係の傾向を検討するために 2 検定を行ったところ，母語使用の分布に有意な偏りが認められ，残差分析の結果，中級の英語母語話者は母語を使う割合が高いことが明らかになった。次に，母語での思考活動の度数分布について 2 検定を行ったところ，思考活動の分布に有意な偏りが認められ，残差分析の結果，中級の英語母語話者は作文の進め方や言語形式に言及するようなメタ的な言い方，中国語母語話者は読み直しと翻訳，韓国語母語話者は翻訳が多いことが明らかになった。

本研究は科研費若手研究 B21720189「第二言語作文のプロセスモデルの構築」の助成を受けている。

（国際教養大学）